

## 令和5年度年報の発行に寄せて

院長 阿部隆之

2006年に新築移転となって早18年が経過し、この間、医師や看護師、他職種職員の顔ぶれも大きく変わりましたが、当地の急性期医療を支える中核病院として、変わらず市民の健康に貢献できたことは、ひとえに職員の皆様の自覚と努力の賜物と、心より感謝申し上げます。

さて、私は本年度から院長を拝命しました。2020年から2024年まで、まさに新型コロナウイルスとの闘いに辣腕をふるってきた佐藤耕一郎元院長の後を受けたわけですが、新型コロナウイルス感染症は2023年に指定感染症5類となり、2024年からは空床確保補助金が完全になくなり、通常感染症と同等の扱いとなります。これまで、病院収支の実態をカモフラージュしてきたこの補助金がなくなることによって、本年度からは純粋に医業収益のみで勝負するという厳しい現実が待っています。さらに労働環境の面では「上限規制付き医師の働き方改革」が開始となり、救急医療等への影響は小さくないと考えざるを得ません。収益確保と労働時間規制という一見相反する問題に対応しなければならないということで、職員の皆様にも様々なアイデアを出していただき、新しい時代に対応できる病院への変革が期待されています。

そんな中でも、脳血管疾患への血管内治療の体制が整ったことは大きな希望のひとつです。両磐地区のみならず、胆江、宮城県北からの患者が見込まれ、この地域に新たな治療法を提示できれば、当院の価値はますます高まるものと思います。また、これまで通り、「地域がん診療連携拠点病院」や「地域周産期母子医療センター」としての活動は継続され、今後も住民の期待に沿う医療を行っていかねばなりません。

新型コロナウイルス感染症は完全に終息したとは言い難く、市中や院内でも散発的発生を認めています。新たな時代に即した対応が求められます。基本的に病院としてはゼロコロナを希求しますが、おそらくは困難でしょう。その中でも医療の質を落とさないための工夫が必要です。

このように2024年は、当院のみならず、日本全国の医療機関にとって、新たな旅立ちともいえる年であり、当院も職員一丸となってさらなる高みを目指し、邁進しなければならない年です。そして、来年のこの年報には過去よりもさらに高い成果が記録できることが望まれます。職員の皆様が、明るく健康な職場の中で存分に実力を発揮していただけることを祈念します。